

Title	臨床コミュニケーションの冒険
Author(s)	本間, 直樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2002, 10, p. 16-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/5634">https://hdl.handle.net/11094/5634</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 臨床コミュニケーションの冒険

本間直樹

現在、大阪大学臨床哲学研究室は、同研究室のメンバーに加え、同大学人間科学研究科、東北大学、日赤看護大学など他の研究機関に属する研究者数名とともに「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」というプロジェクトに取り組みはじめた。なお同プロジェクトは文部科学省より助成を受けている（平成14・15年度科学技術振興調整費・科学技術政策提言）。

科学技術政策というマクロな意思決定の場面であれ、および医療・福祉・教育など個々の臨床現場での意思決定の場面であれ、利害や立場の異なる当事者、とりわけ異なる専門家の間、専門家と非専門家の間には双方が十分に理解しあえるための「適切なインターフェイス」が欠けている。

本プロジェクトはこのような状況を改善するため、新しいコミュニケーション・インターフェイスとして「臨床コミュニケーション」を開発し、それを各場面で活用するとともに、社会的コミュニケーション構造をさらに活性化する政策を提言する。具体的には、1. 対人援助における臨床コミュニケーション 2. 臨

## 出発点としての諸課題

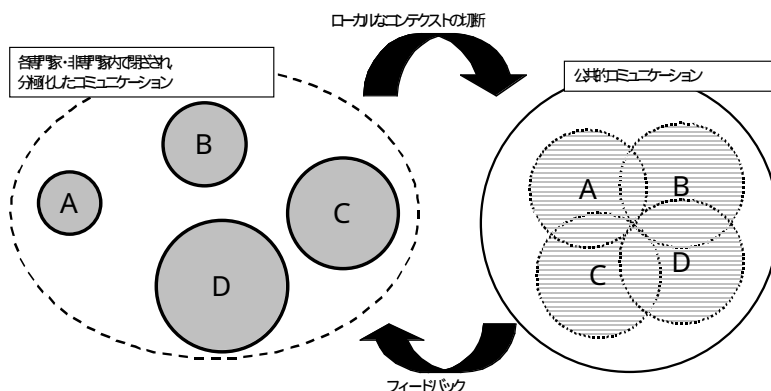
- 専門家/非専門家/専門家/非専門家/専門家/非専門家間の適切なインターフェイスが欠けている
- 専門家内でのコミュニケーション慣習
- 専門家/非専門家間の偏り
- 専門家/非専門家間では「素人」にすぎない
- コミュニケーション=情報伝達のみならず、適切なコミュニケーションのためのコストが軽減される
- 偏った消費者・患者イメージ（無知 自己中心的・・・）
- 受益者（消費者 患者 その他）からの自己主張のチャンネルがない



コミュニケーションの断絶・分極化

## 閉じたコミュニケーション慣習

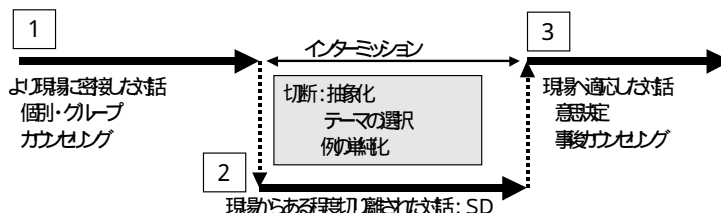
- 分極化したコミュニケーション慣習・状況から抜け出すために



床コミュニケーションの領域  
横断的なネットワーク形成  
(一般国民の参加) 3. 臨床  
コミュニケーションの倫理と  
統合プログラムの構築に焦点  
を当て、新しい臨床コミュニ  
ケーション文化の構築を視野  
に入れる。こうして、死生と  
いう根本的な問題を含む、市  
民のニードとインタラクト可  
能な科学技術政策の立案・実  
施に貢献することを目的とする。

## 対話コンポーネントのモデル

1. 事前カウンセリング(個別・集団)による聴取と  
テーマの査定(情報集と問題の掘起こし)
2. ある程度抽象化したテーマを査定し、テーマ別に集  
中対話を行う(SDなど: 10人以下の小規模なもの)
3. 2で話し合ったことを1で得た仲間とのエテ  
クストに当てはめる



現在は、このような臨床コミュニケーションの具体的モデルの一つとして、複数の対話方式を組み合わせた「対話コンポーネント」を制作中である。これは主に欧州で実践されている哲学的対話方法「ソクラテック・ダイアログ(SD)」を基礎にし、また現在ウィーン高等研究所が行なっている「異種移植」に関する社会調査型SDを参照しつつ、それを改良・拡張するかたちで構想された。これは現場当事者・関係者における相互理解の生成、問題の発見・共有、対話スキルの促進・教育のための方法として、政策立案を含む公共的意思決定過程や各臨床現場において広く活用されることを目指している。

(ほんまなおき)

### 高校での哲学教育 福井高校について

三浦隆宏

臨床哲学研究室では、今年の四月から大阪府立福井高等学校(茨木市)において、「出会いのてつがく」という選択科目を提供するようになった。福井高校は昨年度から『普通科総合選択制高等学校』としてリニューアルされ、生徒一人ひとりの興味・関心に応じた多彩な「エリア履修科目」や「自由選択科目」を設定しているユニークな高校である。当研究室では、一昨年度から院生が授業見学に訪れたり、また「ドリカム講座・マンガからテツガクへ」(全5回)を行うなどして連絡を取り合っており、今回「選択科目のひとつとして「哲学」の授業を担当しませんか」というお誘いを受け、喜んで引き受けることになった。

時間帯は、毎週火曜日の5・6限。研究室の院生数人が中心となってプロジェクトチームを組み、臨床哲学に関わる多彩な人たちの協力を仰ぎながら、授業内容の企画立案、および実行にあたっている。毎回生徒たちに関心を持ってもらうかに苦心し、工夫を重ねながらこれまでやってきた。現在、ようやく二学期が終了したところであり、また院生も個々の研究活動との両立に苦慮しているため、今回のメチエでの「経過報告」は見送り、次回に特集を組んで一年間の授業をまとめたいと思っている。(みうらたかひろ)